

「インフラ文学ツーリズムの取組」

【地域の現状と課題】

新たなインフラツーリズムの展開

- 後志では、鉄道や港湾、道路など、早くからインフラ整備が進められたこともあり、多くの文学者が訪れ、人々の営みが文学に記されている。
- 観光における人々の目的は、「モノ」消費から「コト」消費へと徐々に変化してきており、定型的な観光コンテンツをただ巡るだけではなく、その土地でしかできない特別な体験が加わることが求められており、後志においても同様の傾向がみられる。

歴史資源や歴史シナリオを伝えていくインフラ整備

- 北海道開拓の時代から、人々の生活を豊かにしていく礎となったインフラ整備の歴史は、北海道開拓の歴史と共に語られ、伝えられていく必要がある。

【取組に至る経緯】

- 後志では、鉄道や港湾、道路など、早くからインフラ整備が進められたこともあり、多くの文学者が訪れ、人々の営みが文学に記されている。このような「文学」の舞台となった場所を訪れながら地域の魅力を探っていく旅という視点で、文学に描かれた場所、あるいは文学者にゆかりの深い場所を巡る「後志文学ツーリズム」が当時（平成29年度）の小樽開発建設部職員から提案された。
- 北海道開拓の時代から、人々の生活を豊かにしていく礎となったインフラ整備の歴史は、北海道開拓の歴史と共に語られ、伝えられていく必要がある。後志を舞台にした「文学」においては、インフラ整備の歴史が描かれたものが多くある。そこで、「後志文学ツーリズム」に「インフラ整備の歴史」を組み込み、令和元年度から「後志インフラ文学ツーリズム」という形で進めていくことにした。

▼後志インフラ文学ツーリズムのきっかけとなった後志文学ツーリズム

後志文学ツーリズム

- 北海道開発局小樽開発建設部では、「食」と「観光」を担う「生産空間」を支える取組として、「文学に縁のある地」を巡るツーリズムの取組として「後志文学ツーリズム」を発足。



- 小樽開発建設部管内（後志）を3つの地域に分け（日本海側、羊蹄山麓、小樽市内）、各エリアの文学舞台を巡るモデルルートを設定。



後志インフラ文学ツーリズム

- 市立小樽文学館において2022年2月※に「後志インフラ文学展」と題し、「鉄道と文学」「トンネルの歴史」「道路と文学」「港湾と文学」「河川と文学」「農業と文学」という6部門で構成した展示会を開催。

※ 当初は2021年5月に開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により開催延期



- また、2021年10月には北海道開発局で開催している「インフラわくわくツアー」において、「後志の文学とインフラ整備の歴史」ツアーを実施。



「インフラ文学ツーリズムの取組」

【具体的な取組内容】

小樽開発建設部の関わり

- 文学の舞台となった場所を訪れながら地域の魅力を探っていく「後志文学ツーリズム」に「インフラ整備の歴史」を組み込み、「後志インフラ文学ツーリズム」という形で進めてきた。
- 「インフラ」×「文学」の取組を知ってもらうことを目的に、下記の各取組を実施した。
- 小樽市内、羊蹄山麓、日本海沿岸における文学の舞台となった場所を訪れて感じたことを文学作品の引用と共に紹介する「後志文学ツーリズム」の構築、小樽開発建設部HPへの掲載
- 日帰りコースのルート作成、小樽開発建設部HPへの掲載
- 古くから鯉漁で栄えた日本海沿岸の文学とインフラ整備の歴史のトピックを集めた小冊子の作成
- インフラ整備の歴史と文学とのつながりを鉄道、道路、トンネル、港湾、河川、農業の6分野に分けてパネルにまとめた「後志インフラ文学展」の開催及び展示
- 「インフラわくわくツアー」における「後志インフラ文学ツーリズム」ツアーの企画及び実施

▼1.HPに掲載した後志文学ツーリズム



▼4.後志インフラ文学展



展示パネル

▼2.後志文学ツーリズムモデルルート



展示空間の様子



YouTubeにアップした「達人の解説」

オンライントークショー

▼3.「後志インフラ文学ツーリズム」小冊子



▼5.「後志インフラ文学ツーリズム」ツアー



開発建設部職員によるバス中での説明

開発建設部職員による現地での説明



各施設の職員によるツアー専用の特別ガイド

「インフラ文学ツーリズムの取組」

【取組の効果】

「後志文学ツーリズム」の作成、HPへの掲載

- 美唄中学校では「後志文学ツーリズム」のレポートを総合学習の時間に教材として用いており、教育の場でも活用されている。
- 文学がテーマの観光案内は非常に好評であり、新聞に載る等、話題となった。

日帰りコースのルート作成、HPへの掲載

- 一般の方から「全部実際に巡ってみた」という言葉をいただいた。

小冊子の作成

- 玄関ロビーに設置した小冊子を持ち帰る人が多くいた。
- 「ほっかいどう学」のように、教育関係の方に影響があった。小冊子が欲しいという声もいただく。

「後志インフラ文学展」の開催

- オンライン開催となったが、展示空間でトークショーを行うことで、展示空間を披露でき、また全国から視聴いただけた。
- アンケートでは「とても満足」と「満足」の合計が85%以上と高評価だった。
- 「もし文学とインフラを合わせたツアーを開催するとしたら、参加したいと思いますか？」という設問では、95%が参加したいと回答した。

ツアーの企画及び実施

- コロナ対策で高価格となったが、17名の参加者が集まった。施設担当者がインフラと文学の繋がりという観点から説明くださり、満足度が高かった。

【今後の方向性】

- インフラと文学、北海道開拓の歴史という観点で、「ほっかいどう学」との連携や教育関係の方へ継続してPRを進める。
- 北海道開拓期にインフラ整備が急がれた経緯やその背景と全道各地にゆかりがある文学を結びつけることで、全道各地での横展開が可能である。
- 全道各地に横展開が広がれば、各地と連携し、「北海道文学インフラツーリズム」となるよう取組を期待したい。
- インフラツーリズムにおいて、文学の視点を取り組んだ様に、単にインフラ施設見学だけでなく、ストーリー性を持ったツアー企画が横展開としても期待される。

▼教育の場で活用されている「後志文学ツーリズム」



「後志文学ツーリズム」のレポートを閲覧する
美唄中学校3年生の生徒



「後志文学ツーリズム」のレポート画面

参加者などの声

- 「後志文学ツーリズム」の作成では、一般の方から「**ありきたりな観光パンフレットとはひと味もふた味も違う**」という言葉をいただいた。
- 「後志インフラ文学展」では、参加者からは「**関係者の熱意が伝わってくるいい企画だったと思う**」「**文学をミックスした催しは新鮮かつ興味深かった**」「**九州からの参加であったが、その距離を感じさせなかったのは、登場された皆様やスタッフの熱意と、オンラインという新たなICTとの見事な融合のおかげではないか**」という言葉をいただいた。

「漁港を活用したインフラツーリズムモニターツアーの取組」

【地域の現状と課題】

インフラツーリズムの浸透

- インフラツーリズムの催行率が低い。その要因については、ツアー自体の磨き上げができていないことやコロナ禍の影響などが挙げられる。
- 北海道開発局では、Facebookに「インフラツーリズム北海道」を令和2年に開設しているが、コロナ禍等の影響もあり、認知度は低い状況である。
- 参加者の年齢層が高齢者に偏っている。次世代を担う若者にインフラの役割や建設業に関心を持ってもらう必要があり、シニア層以外の年齢層、特に若年層の参加を如何に増やしていくかということも課題である。

地域資源を活用した新たな観光産業による活性化

- 積丹半島の関係町村は、水産業で食料供給に大きく貢献するとともに、美しい景観に恵まれ、観光地としても重要な役割を担っている地域であるが、人口減少・高齢化が大きく進み、かつて賑わった水産業も低迷してきており、「生産空間」を維持していくことが課題となっている。

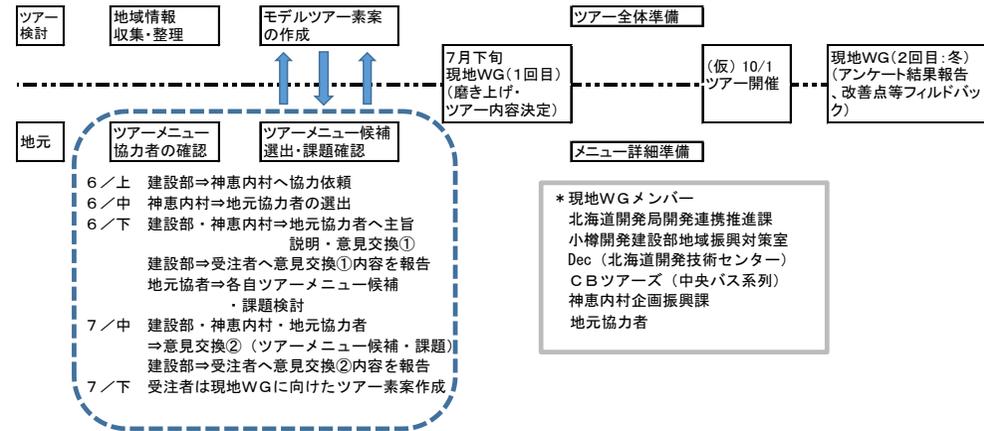
通過型から滞在化型となる観光コンテンツの創出

- 夏場は積丹町を中心に、積丹ブルーと呼ばれる自然景観やウニを目的に多数の観光客が訪れているが、それ以外の季節は観光メニューが乏しく観光客も少ない状況である。さらに、古平町、神恵内村ともに、観光の主要目的地ではなく、通過されてしまう傾向にあり、観光資源を活用しきれないという状況でもある。

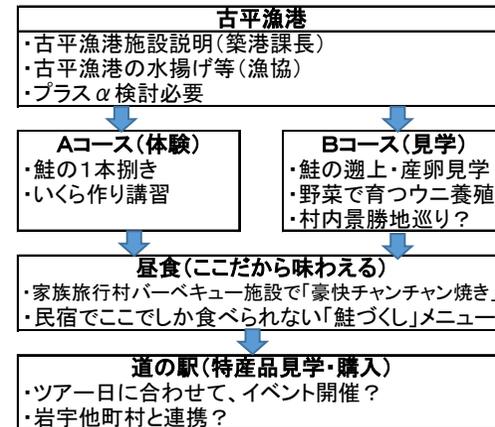
【取組に至る経緯】

- 第8期北海道総合計画上の課題として、生産空間維持のための地域資源活用 人手確保の重要性等が挙げられている。本地域では、アドベンチャートラベルは既に実施されていたものの、地域資源自体を活用した観光は少なかった。そこで、地域の活性化と地元素材を活用した観光を目的に、地元と検討を進めた。
- 当地域では、ウニ以外にも鮭やほっけなど豊富な水産資源を有しており、「持続可能な稼げる観光」を目標としている神恵内村では、村の漁業の主要品目であり、村の魚にもなっている「鮭」を使って地域活性化の取り組みを仕掛けたいという意向を持っていた。

▼当時の地元調整の進め方とスケジュール



▼メニューたたき台として作成したツアーイメージ



メニュー以外のコンセプト
・ちょっとしたおもてなし、地元の方とのふれあい
・村長のサプライズ登場?

▼インフラツーリングモニターツアー 広告



20名 (40~80歳代 平均63歳)
札幌・近郊在住の方が参加